

学校校舎を再生し、文化熟成の場を目指す

ナビゲーター
小暮 宣雄
Nobuo Kogure

京都芸術センター

閉校した小学校をコンバージョン

京都市の四条烏丸周辺は、昔から西陣織などを取り扱う商家が多く集まっていたところ。そついう商人たちが、自分の子弟が通う学校として創立したが、明倫小学校」だつた。建物は昭和六年に改築され、平成五年に閉校となるまで六二年に渡って使われたが、京都市では、一時は取り壊しの話も出たこの小学校の持つ歴史や建物が持つ文化的価値に着目し、京都における芸術振興の拠点施設として改築・再生させ、「京都芸術センター」として生まれ変わらせた。

オープンは平成二二年四月。同センター



小学校として使われていた当時とほとんど変わらない「京都芸術センター」の外観。単に懐かしい雰囲気があるだけでなく、昭和初期の建築だけに、細部まで凝った意匠が施され、ここだけにしかない個性を生み出している

京都芸術センター

〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2
電話：075-213-1000



かつては正門だった正面玄関。左手の建物は現在、事務所として使用されている。一般の人の利用は、突き当たりの出入り口からとなるが、バリアフリー化のため自動ドアに変わり、元の形とは変わっている



たまたま、芝居の稽古に来ていた教え子と立ち話をする、今回のナビゲーター小暮宣雄氏



南館2階に設けられた「談話室」。黒板や机・椅子などは、小学校当時のままに残されているので、利用者もリラックスして利用できる



北館2階の教室は「制作室」と名付けられた、自由な制作活動のスペースとなっている。その中の1室、床がフローリングになっている部屋では、ちょうど創作舞踏の稽古が行われていた

の企画から完成までを見続けてきた京都橘女子大学文化政策学部助教授の小暮宣雄氏は、「京都に蓄積されてきたすぐれた伝統文化を現代に活かしつつ、美術、音楽、演劇などさまざまな分野の芸術が出会い新たなものを生み出す場として、さらにその成果を生活や技術、産業へとつなぐことでいっそう豊かな都市を再生させる場として構想されました」と説明する。

同センターは、芸術の制作・提供の場として必要な改修を行っているが、基本的に、小学校の教室をそのまま利用した「制作室」をはじめ、昭和初期の建物らしい高い天井を活かしたギャラリー、講堂を再生した舞台芸術の公演などに使われるスペース、芸術に関する情報を提供する図書室など、もとの建物が持つ魅力を十分に活かした計画の下で行われた。「子どもたちが通っていた小学校というだけで、とても親しみが持てて近づきやすく、そこが、新しい思い出を創り出す場となる。そういった点で、小学校をリノベーションして、芸術を発信する場をつくったというのは、非常によかったと思います」と小暮氏。

細部まで凝っている意匠をはじめ、油引きの廊下、ガラスが入った木の扉、大きな庇が生み出す陰影など、昔懐かしい小学校の風景が残る同センターは、京都の持つ伝統を引き継ぎながらも、さらにそれを未来に発展させるのに、まさに相応しい場だと言えよう。

(文責・CEL編集室)

CEL

小暮 宣雄(こくれ・のぶお)

京都橘女子大学文化政策学部助教授。1955年大阪市生まれ。東京大学法学部卒業。78年総務省に入省し(旧自治省採用)旧自治省企画室(課長補佐)では「ふるさと創生」「地域づくり推進事業」を担当。2001年3月末に総務省を退職し、同年4月から現職。



ほとんど手が加えられていない廊下。油引きの床や木の扉など、昭和30年代以前に生まれた人なら誰でも『懐かしい』と思わずにいられない空間が、ここには残されている



美術、音楽、演劇、ダンス・舞踊、伝統文化、京都の文化に関する約2200冊の図書・雑誌が置かれている南館1階にある「図書室」